
ポストモダンのゆくえ

— 『ポストモダンの条件』におけるパラロジ論をめぐって —

馬場智理

要約

「ポストモダン」は、多方面の学問領域において用いられている概念であるにもかかわらず、明確な定義を有しているとはいいがたい。だが、ポストモダン概念が唯一の内容を持たないとしても、そのことが欠点なのかどうかは改めて確認しておくべき必要がある。そこで、本論では、ポストモダン概念の哲学的本質を再確認し、現代の混乱したポストモダン論に一定の内容を与えることを目的とする。検討の対象とするのは、リオタールの『ポストモダンの条件』におけるパラロジ論である。パラロジとは、多様な知の在り方を認める知の論理のことである。彼のポストモダン概念は、その意味で相対的性質を有している。ただし、そうした相対的な知のありようこそが、ポストモダンにおける唯一の知の論理であるという、いわば、メタ論理として、パラロジに積極的意味を見いだそうとしている。本論では、ポストモダンの特徴、パラロジと言語ゲームの関係、パラロジと他者という観点から、ポストモダン概念の定義を明確化するとともに、現代においてなおその概念が有効であることを指摘したい。

キーワード：ポストモダン、パラロジ、言語ゲーム、他者、暴力

1. 序論

「ポストモダン」は、哲学・思想の分野のみならず、多方面にわたって用いられている概念である。にもかかわらず、あるいは、それゆえにというべきかもしれないが、「ポストモダン」が明確な定義もって用いられているとはいいがたい現状がある。「ポストモダン」を字義どおりに解釈すれば、それは、「モダンの後」という時代区分を示しているにすぎない。そのため、モダンの衰退、モダンへの批判といった緩やかな枠付けはできるとしても、その具体的内容は論者によって様々であるのが事実である。この概念は、モダンの終焉と新たな時代の予期という、多分に感覚的なものに支えられている面もあり、論理的な曖昧さを許すことにもなっている。

むしろ、ポストモダンという概念によって、人々が一定の事象を想起することのできた場合がないわけではない。例えば、1980年代における冷戦体制の崩壊や高度技術社会の出現は、近代（モダン）以降続いてきた人間や社会の在り方が終わり、新しい時代の到来を実感させることになる。人々がこのような皮膚感覚を共有することによって、この時期のポストモダン概念は一定の共通了

解を有していたといえる。ただ、モダンに代わる積極的な人間、社会理解が提示されるまでには至らなかったため、時代の変化が一段落するとともに内容の混乱を招き、ひいてはポストモダン概念そのものへの疑念や批判も生じてくる。

ポストモダン概念批判の代表的なものとしては、それが相対主義であるとする主張が挙げられる。つまり、「ポストモダン」の内容はもっぱらモダンのものを批判することに終始しており、何ら新たな積極的概念を提示しない相対主義に留まっているという批判である。確かに、論者の個々の文脈においてポストモダン概念が用いられている現状からすると、そうした批判もあながち的外れではない。だが、ポストモダン概念が唯一の内容を持たないとしても、そのことが欠点なのかどうかは改めて確認しておくべき必要がある。というのも、相対性それ自体は、価値を持たない中立的な特徴だからである。長所なのか短所なのかは、議論全体の中でその概念が果たす役割を吟味しなければ判断できない。

そこで、本論では、ポストモダン概念の哲学的本質を再確認し、現代の混乱したポストモダン論に一定の議論の枠組を与えることを目的とする。検討の対象とするのは、リオタールの『ポストモダンの条件』におけるパラロジ論である。リオタールは、ポストモダンを哲学的概念として扱った最初の人物であり、ポストモダンの知を基礎づける論理としてパラロジを主張した。パラロジとは、多様な知の在り方を認める知の論理のことである。彼のポストモダン概念は、その意味で相対的性質を有している。ただし、そうした相対的な知のありようこそがポストモダンにおける唯一の知の論理である、というメタ論理としてパラロジを位置づけることにより、それに積極的意味を見いだそうとしている。このような、リオタールのパラロジ論を検討することによって、ポストモダン概念をその本来の意図に即して定義することができるであろう。

2. 『ポストモダンの条件』におけるポストモダン概念

『ポストモダンの条件』の中心的課題は、現代において科学的、社会的知の正当性がどのように定められるかという問題である。リオタールは、近代（モダン）においては、これらの知が個々別々にではなく、統一的な言説（物語）によって基礎づけられていたと指摘する。そして、現代ではその物語が知を基礎づける効力を持たなくなったとして、この時代を「ポストモダン」と呼ぶ。本章では、まず、リオタールのポストモダン概念を確認する。

(1) 「モダン」と「ポストモダン」

序で述べたように、その言葉自体は単なる時代区分でしかないポストモダンという用語に、リオタールは、知の正当化をめぐる画期的な変化という意味を込める。このポストモダンはモダン（近代）との対比において理解されていることから、まずはモダンとはどのような時代的特徴を持っていたのかを確認しておきたい。

リオタールは、モダンを次のように説明している。

科学が、有益な規則性を述べることだけに自らを限定するのではなく、真理を探究するので

ある限り、自己自身が従うゲームの規則を正当化しなければならない。そのため、科学自身の立ち位置を正当化する言説が生み出され、それは、哲学と呼ばれてきた。このメタ言説が、何らかの大きな物語—精神の弁証法、意味の解釈学、理性主体、労働主体の解放、富の発展—に、明らかな仕方で関わっているならば、そのような物語によって自らを正当化する科学を、「モダン」と呼ぶことにする。^①

デカルトがその嚆矢とされる近代哲学においては、権威的、宗教的な論理から離脱し、人間自身があらゆる知的活動の主体となっていく。人間は、真の理解を妨げる様々な障害を取り除き、自らの知的能力＝理性を高めていくことによって、真理を知るに至ると考えられていた。そうした近代の知的活動を支えてきた言説が「大きな物語」である。大きな物語の例として挙げられているのが、「精神の弁証法（具体的なものの弁証法的発展による普遍的理念の実現／ヘーゲル）」、「意味の解釈学（宗教や習慣から解放された近代認識論）」、「主体の解放（労働者の解放／マルクス）」、「富の発展（技術主義、工業主義を通じた社会の発展／資本主義）」などである。それらに共通するのは、理性主体としての人間が世界を合理的に解明することにより、世界の構造が明らかになり、また、社会が望ましい方向に進んでいくという内容である。近代において、知的活動は、こうした物語を実践する活動であるとされることによって、その正当性が基礎づけられていた。

このようなりオタールの理解によれば、例えば、科学という知が正当であるのは、科学的方法自体ではなく、それが大きな物語に沿った活動であることによって認められることになる。われわれの通常理解からすると、学問（特に科学）は、宗教などの外的な権威を排除し、人間自身の能力に依拠するものであって、他のものによって根拠づけられる必要はないようにも思われる。だが、リオタールは、科学であっても、それ自身だけでは正当性をもちえないと考える。科学において用いられる判断基準は、本来的に普遍性を持つものではなく、専門家の間で行われる議論によって定められらものである。それゆえ、科学だけでは、自ら定めた基準に従って自らの言説を判断するという循環に陥ってしまうとして、次のように述べられる。

科学的知は、別の知、つまり科学的知にとっては非知である物語的知に頼らない限り、自らが真なる知であることを知ることも知らせることもできないし、さもなくば、科学的知は自己自身を前提とせざるを得ず、それによって、自らが非難するもの、つまり不当前提（論点先取）、偏見の中に陥ってしまう。^②

したがって、科学が単なる科学者間の取り決めにとどまらず、普遍的真理を明らかにするものであるといえるためには、それが大きな物語に合致した方法であるという理由が必要となる。同様の構造は、社会的正義についての知、つまり、何が正義であって何が正義でないかの判断基準についても妥当する。社会的知も、労働者の解放、あるいは、富の発展という物語によって支えられてはじめて、正当性を主張できるようになる。

近代の知的活動は、このようにそれ自体のうちに正当性を持つのではなく、知を下支えする大き

な物語（メタ物語）に依存して成り立っているという構図がある。そして、この物語の主体が、理性的人間であった。いかえれば、人間が自らの理性に従って無知を克服していくことによって、自然の構造を理解したり、自由で平等な市民社会を構築することが可能となり、それによって人類の普遍的平和や幸福の増大が実現していくという歴史の物語（ストーリー）が、近代を貫いていたのである。

（2）「大きな物語」の終焉

リオタールは、「極度に単純化していえば、「ポストモダン」とは、このメタ物語に対する不信感であるといえる。」⁽³⁾と述べ、「ポストモダン」とは、上のような「大きな物語」への不信が生じ、もはや知を基礎づける効力を持たなくなっている事態のことであるという。では、なぜ、現代において大きな物語が信頼を失ってきたのであろうか。リオタールは、その理由の一つとして、技術の進歩と資本主義の拡大を挙げている。

ここ（ポストモダンの問題：筆者補）には、正当化の要請を原動力とする脱正当化の訴えがある。十九世紀末以来、諸々の表徴が積み重なっている科学的知の「危機」は、諸科学の偶然的な増殖の結果生じているのではなく、そのような増殖自体は、技術の進歩や資本主義の拡大の結果であろう。危機は、知の正当性に関する原理の内的な浸食から来ている。⁽⁴⁾

もともと近代において、技術の進歩や経済的利益は、知的活動の派生的結果であって、その本来の目的はどこまでも真理の発見にあった。知的活動の第一の目的がそうであることは、大きな物語の存在が保証していた。しかし、現代においては、知的活動の目的が、真理の発見ではなく、それまで派生的だった技術の進歩や経済的利益そのものになっている。ここにおいて、知の側が技術や資本主義に資するという逆転現象が生じてくる。こうした現状においては、当然知の意味も変わってくる。

大きな物語の目的は人間の真理の探究であり、それゆえ、その実現の方法である知の内容が、真理であるとみなされた。それに対し、技術の進歩や富の増大の目的は、人間の真理の探究そのものではなく、効率性と力の増大にあるとされる。

技術はひとつの原則、すなわち遂行の最適化の原則に従っている。…それは、アウトプットの増大とそれを得るためのインプットの減少という原則である。それゆえ、それは、真理、正義、美でもなく、ただ効率だけに関与するゲームである。⁽⁵⁾

今日の出資者の言説においては、唯一信じ求めているもの、それは力である。学者、技術者、諸装置などを買うのは真理を知るためではなく、力を増大させるためである。⁽⁶⁾

技術の進歩それ自体は、真理とは直接的関係をもつことはなく、より効率的に目的を実現する方

法の開発に焦点が当てられる。また、富の増大も真理との直接的関係はなく、ただ、富の所有者の力の増大という目的のために目指される。したがって、人間の理性的活動は、もはや真理であるということではできなくなり、効率性や力の増大といった目的に資するという意味しかもちえなくなる。リオタールは、知の正当性が、このように現実の世界の技術や富を根拠とするようになり、それとともに近代における基礎づけを担っていた「大きな物語」が力を失っていく事態を、ポストモダンと呼ぶのであった。

(3) ポストモダンにおける知の論理としてのパラロジ

ポストモダンにおいては、諸々の知の正当性を基礎づけていた大きな物語が喪失してしまった。そうした状況をもたらした大きな原因は、技術の進歩や富の増大が、知の付随的結果ではなく知の目的となっていることにあるとされた。そこには、知は技術や富に資するために存在し、他方、技術や富も、そうした知の発展のために投入されるという循環関係がある。

社会の制御機能、それゆえ、再生産機能は、…自動人形に託されるようになる。⁷⁾

このような循環関係において、技術の進歩や富の増大という基礎は、大きな物語に代わる普遍性をもちえない。それゆえまた、そこでの知も近代と同様の正当性をもちえない。というのも、知と技術や富が相互に基礎づけ合う関係においては、その関係自体が外部から基礎づけられていないため、ある知が正当であるといえるのは、その循環関係の内部においてのみということになるからである。

ここで、ポストモダンにおける知は、問題を抱えることになる。効率性や力の増大は、確かに知によってもたらされる結果として大きな部分を占める。しかし、モダンにおける真理の解明という目的と同等の普遍性を持つとはいえない。なぜなら、同じ効率性や力の増大によって、他方で不利益を被る人間もいるからである。したがって、大きな物語という基礎づけを失う一方で、技術の進歩や富の増大という目的を認めないならば、いかなる知も正当性について語るができなくなってしまう。これは、近代的な知の体系の崩壊という意味では、憂慮すべき事態である。しかし、大きな物語が存在しない以上、そうした体系にかかずらうのではなく、むしろ、現状に即した知の基礎づけを志向するべきであるとして、リオタールは次のように述べる。

しかしながら、ポストモダンの状況は、幻滅とは関わりなく、また、脱正当性を目指す盲目的な実証主義とも関わりない。では、メタ物語の後で正当性はいったいどこに存在するのか。(中略) ポストモダンの知は、決してただ単に諸権力の道具であるのではない。それは、差異に対するわれわれの感覚を研ぎすまし、また、共約不可能なものに耐えるわれわれの能力を強化する。ポストモダンの知それ自体は、その根拠を専門化たちのホモロジーのうちに見いだすのではなく、むしろ発明家たちのパラロジのうちに見いだす。⁸⁾

大きな物語の喪失は、知の正当性を判断する絶対的な根拠がないということである。それはまた、特権的な地位にある知が存在しないことも意味する。特権的知が存在しない現実、確かにわれわれに幻滅をもたらすかもしれない。しかし、もはや大きな物語が存在しない以上、なおも特権的知とされるものに依拠した主張は、単なる強弁にすぎなくなってしまう。したがって、ポストモダンにおける知は、大きな物語に支えられた特権的知ではなく、正当性においては等しい知が並存するという在り方を認めるべきであるとされ、それが「パラロジ」と呼ばれるのである。

では、パラロジとは、どのような知の在り方なのだろうか。リオタールは、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームという概念を援用しながら、異なる言語ゲームのとしての知が並存する事態としてパラロジを説明している。そこで、次に、言語ゲームとの関係から、パラロジの構造を確認していくことにする。

3. パラロジと言語ゲーム

大きな物語の喪失したポストモダンの状況においては、どの知も絶対的な正当性を主張することができず、等しく正当なものとして存在する。リオタールがいうこのパラロジにおいて、(もはや大きな物語は存在しないゆえに) 知の正当性の基準は、知が成り立っているという事実(事象)に焦点が当てられるようになる。彼自身の言葉でいえば、「言語事象に、事象の中でも言語行為の面を強調する」⁹⁾ということである。そして、こうした仕方での知の正当化の構造が、後期ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」という概念を用いて説明されている。

後期との対比でいえば、前期のヴィトゲンシュタインは、言語の意味について、ある言明(命題)とその指示する対象と一致という規則に基づいて考えていた。例えば、「雨が降っている」という言明が意味を持つのは、実際に水滴が空から落ちてきている状態が現れている場合であり、そうでないならば意味を持たない、あるいは、誤っている。しかし、われわれの日常では、言明が対象と一致しなくとも意味を持つ場合がある。例えば、実際に雨が降っていなくても、「雨が降っている」という言明によって、「傘を持っていくべきである」、「天気予報が外れた」などの意味が伝えられる場合である。後者においては、言明の送り手と受けての関係、言明が発せられる状況などによって、同じ言明でも異なる意味を持つ。前者との関係でいえば、言明が意味を持つのは、必ずしも、言明と対象の一致という規則に基づく場合のみではないということが明らかとなる。

後期ヴィトゲンシュタインは、言明とその指示対象との関係から言語を理解する前期の立場を転換し、言語活動における言語の働きや効果に焦点を当てる。そして、後者の観点から捉えられた言語の構造がゲームと類似性を持っていると考え、言語活動を「言語ゲーム」と称する。言語ゲーム論にはいくつかのポイントがあるが、リオタールのパラロジ論との関わりで着目すべきなのは、言語行為における規則の位置づけである。

ゲームは、プレーヤーがルール(規則)に則ってプレーすることで成立し、反対に、プレーヤーがルールから外れたプレーをすと成立しなくなってしまう。したがって、われわれは通常、ゲームを成立させるのはルールであると考え。ただし、プレーヤー全員が、このルールから外れたプレーを行う場合、従来のルールを基準とするゲームは成立しないけれども、プレーの成立という別の

観点からすれば、新たなルールに則ったゲームが成立していると理解することができる。例えば、サッカーのルールでは、手を用いると反則になる。しかし、プレーヤー全員が手を用いてゲームを行う場合、もはやサッカーとしては成立しないが、別のルールに則ったゲーム（例えばラグビー）として成立しているということができる。あるゲームが成立するためには、そのゲームのルールは守らねばならない。しかし、なんらかの「ゲームが成立する」ために、必ずしもそのルールが守られなければならないわけではない。

ゲームが成立するためには、規則は必ず守られなければならない。だが、規則は唯一普遍的なものではなく、ゲームの種類によって様々な形態をとる。ヴィトゲンシュタインは、言語行為の規則も、ゲームのそれと同様の性質を持つと考える。彼は、「どのような行為も、その規則と一致させることができる」（『哲学探究』201章）と述べ、言語行為の規則は、論理的に唯一の仕方では規定されるのではなく、行為ごとに異なった規則が存在すると考える。言語活動の規則がそのようなものであるとすると、規則の絶対的正当性を主張したり、その規則に従わない言語の使用を否定することはできなくなる。また、一般的な規則からすると誤った言語の使用であっても、我々が理解していない規則によって意思疎通が成立する可能性も認められることになる。

このような言語ゲームという観点から言語活動を解釈することによって、新たな言語観が開かれてくる。前期ヴィトゲンシュタインの言語理解では、言語の規則は論理的に唯一の仕方では規定されていた。それは、文の使用の正誤を厳密に判断できる反面、日常的には意味が通じていても、規則に反しているとの理由で、誤りであると判断されるような場合が生じる。後期ヴィトゲンシュタインは、規則の唯一性を否定する言語ゲーム論を展開することにより、日常の多様な言語活動を照射した。

この言語ゲーム論について、リオタールの関心に即してポイントを補足するとすれば、言語活動の規則について我々が言及しうるのは、そこで成立している活動に関してのみであるということである。言語活動が成立していれば、当然そこには活動を成立させている規則が存在する。しかし、反対に、その規則は活動が成立するための必要条件であるということではできない。なぜなら、上で述べたように、別の規則に従って成立する活動もあり得るからである。よって、規則がそのような仕方では存在していることは説明できても、それ以上は語りえない。こうした態度は、言語活動を唯一の規則に従って論理的に分析する立場からすれば、普遍的説明を放棄しているようにもみえる。しかし、むしろ後者の立場では見落とされてきた、各々の活動の内にそれを成立させる規則が存在するという事実に着目することによって、言語活動の多様性に光を当てることを可能にしたところに、言語ゲーム論の本旨があるのである。

言語を用いて行われる知的活動も、上のように活動の参加者が規則に従うことによって成立しているということができる。ただし、それだけでは、知の正当性は参加者が規則に従うという脆弱な根拠によってしか基礎づけられない。したがって、近代では、その規則を「大きな物語」によって基礎づけることにより、知の正当性の普遍性を示そうとした。しかし、大きな物語が喪失すると、そこに残るのは、個別の規則に従って知的活動がなされているという状況である。リオタールがパラロジーと呼ぶのは、このような状況のことなのである。そして、それがヴィトゲンシュタインの

いう言語ゲームと同種のものであるとして、次のように述べる。

多くの異なった言語ゲームがあり、(中略)諸要素の異質性がある。それらの要素が制度となるのは、個別面においてであり、それは、局所的な決定論である。¹⁰⁰

パラロジーにおいて、知の規則の妥当性は局所的、限定的であり、諸規則の間で優劣を決めることはできない。したがって、モダンにおけるように、特権的な知は存在しない。また、このことから、従来大きな物語に合致しなかった知であったとしても、そのような規則に従って成立している知として認められることになる。それは、まさにゲーム毎に異なるルールが存在している状況と同様である。

ポストモダンにおける知は、このように各々異なった規則に従って成立している知的活動が並存する、パラロジーという仕方 で存在する。リオタールは、このことへの理解が、知を唯一の規則に基づかせようとすることの不可能性を知ることにつながるといふ。

われわれが先に、言語ゲームの理論について語るときに参照したのは、この共約不可能性であり、真／偽に関わる表示的ゲーム、正／不正を管轄する規制的ゲーム、そして、効率／非効率性が判断基準となる技術的ゲームの間の区別である。¹⁰¹

知的活動の規則には、真理に関するもの、正義に関するもの、効率に関するもの、など様々なものがある。ただし、例えば、真理と効率性が相容れない場合があるように、規則の違いによって同じ事柄でも判断が異なることがある。モダンにおいては、大きな物語に合致する規則に則った知が正当であり、それに従い最終的な判断を決定した。しかし、ポストモダンにおいて、知は個々の規則に基づいてそれとして成立しており、共約不可能であることを認めなければならない。そうした理解を可能とするのがパラロジーであり、それは、ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論からいえることなのである。

では、リオタールはなぜ、知の共約不可能性にこだわるのだろうか。また、彼がパラロジーを主張する意図はどこにあるのだろうか。そこで、次に「他者」という観点からパラロジー論の核にあるものを明らかにしていくことにする。

4. ポストモダンと他者

リオタールは、ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論をパラロジーの構造を説明するものとして取り入れ、ポストモダンにおいては、知の議論が成立するための規則に絶対的正当性は必要なく、また、どの規則もそうであることを主張できないことを指摘する。ただ、知の規則の絶対的正当性が認められないとすれば、どの知も相対的な真理しかいえないことにもなりかねない。それにもかかわらず、パラロジーを主張するリオタールの真意はどこにあるのだろうか。

(1) ポストモダンにおけるモダンの暴力

上で繰り返したように、モダンにおいてある知が正当性を持つのは、それが、人間の理性による真理の探究という「大きな物語」に基礎づけられているからであった。一般に、それ自身の内に正当性を持っていると考えられている科学や社会科学であっても、その関係構造は例外ではないとリオタールは考える。ただし、我々が知的活動を行う場合、通常、その知の規則は前提として用いられ、その規則自体の正当性は問題にならない。ここに、モダンからポストモダンへの時代の転換の問題が生じてくる。というのも、もし、ある知が、大きな物語の基礎づけを失ったにもかかわらず、なおモダンにおける関係に依拠したまま自らの正当性を主張しようとするならば、それはもはや真理の主張ではなく、他の規則を認めない暴力となりかねないからである。リオタールは、あらゆる事柄がある一つの規則に従って理解しようとする態度のうちに暴力性が含まれていることを、次のように説明する。

暴力とは、なされている言語ゲームから相手を排除すること、あるいは、排除への脅迫をすることによって得られる効率という意味のことである。反論されるがゆえにではなく、プレーすることが奪われると脅迫されるがゆえに、相手は黙るか、あるいは同意を与えなければならない。⁽¹²⁾

科学でいえば、より合理的統一的な論理を作り出すこと、社会科学でいえば、より効率的な社会の在り方を示すことが目指される。そうした合理性、効率性といった規則は、モダンにおいては大きな物語に基礎づけられて正当性を持っていた。しかし、ポストモダンにおいては、それが絶対的な正当性を持つ、あるいは、他の規則に従った知が誤りであることがいえなくなる。それでもなお、その知がモダンの仕方で正当性を主張するならば、それは、その規則に従わない知を排除するか、自らの規則を強制することにしかならない。リオタールがパラロジを主張する意図は、まずもって、ポストモダンの知に潜むこうした暴力性を剔抉し、批判するところにあるといえる。

(2) パラロジとポストモダンにおける知の展開

以上のように、ポストモダンにおいて、ある規則に基づく統一的論理を構築していこうとする態度は、もはや暴力性を帯びざるをえない。そのため、異なる規則による知的活動を認めるパラロジが主張されるのである。パラロジにおける知的活動の規則は、次のように説明されている。

言語ゲームの異形性を承認することは、この方向（パラロジの実践：筆者補）への第一歩である。それが含意しているのは、むしろ、言語ゲームの同形性を前提しそれを実現しようとする暴力を放棄することである。第二は、もし各ゲームやそこで打たれる「手」を定義する規則についてコンセンサスがあるとしても、そのコンセンサスはその場限りでなければならない、すなわち、その場のパートナー同士によって得られるもの、場合によってはいつでも解除できるものでなければならない、ということである。⁽¹³⁾

ここでリオタールは、規則の異質性を認めることは、規則の統一を放棄することである、換言すれば、規則が妥当する対象の範囲を広げるのではなく、どこまでも規則の妥当が局所的であると理解すべきことだと述べている。われわれは、ある規則についてコンセンサスが得られるならば、その規則は普遍的に妥当すると考える。しかし、そういえるのは、実は大きな物語が機能し共有されているからである。よって、大きな物語が喪失すれば、規則へのコンセンサスが得られたとしても、それはその時限りの（ローカルな）ことであって、普遍性を持つとはいえなくなる。

それでも、普遍性があることを前提し、コンセンサスをもたない異質な存在を規則に参加させようとすることは、異質な存在に配慮しているようでいて、実は自らの規則に従わせているにすぎないことになる。リオタールは、この違いに敏感であるべきであると考えており、イノベーションとの違いからパラロジを説明している。知的活動において従来の規則とは異なる知が現れた場合、次のような二つの取りうる態度が考えられる。第一は、異なる規則を用いている存在が自らの規則に参加できるよう改良する態度である。第二は、相互にコミュニケーションが成立しないまま、複数の規則が併存する状況を容認する態度である。後者の方がパラロジに該当するのであるが、リオタールは、これを前者と混同すべきではないとして、次のように述べる。

それゆえ、問題は単にパラロジのみによる権威づけで正当化が可能であるかどうかということである。ここでは、厳密な意味でのパラロジとイノベーションを区別する必要がある。イノベーションは、体系が自らの効率性を改良するために求められたり、あるいはいずれにせよ、そのために用いられる。パラロジは、しばしばその重要性がすぐには認められないような、知の言語行為において用いられる「手」である。⁽¹⁴⁾

異質な存在が自分たちの規則に参加できるよう改良することは、イノベーションであってパラロジではない。パラロジは、異質な存在自身が用いる規則そのものを認めることであり、異質な存在を規則に参加させることは別の概念である。規則の改良によって異質な存在とのコンセンサスを得ようとすることは、規則をより効率的に機能させるという利益にしか資さない、とリオタールは考える。

ポストモダンの状況においては、異質な存在への配慮を目的とした規則の改良であっても、実際には、その規則がより効率的な形で機能するための自己正当化の行為でしかないのではないか。そして、それは、別の規則で活動している人々を自らの規則に組み込むことを強制する暴力なのではないか。こうした指摘は、現代において一定の説得力を持つものであろう。例えば、「民主主義」という規則に従った社会において、その対象を男性から女性へ、健常者から障害者へと対象者を広げようとする動きがある。大きな物語が機能している段階では、それは民主主義社会の主体の対象を広げるという意味があった。しかし、ポストモダンにおいては、同じことが、女性としての活動規則、障害者としての活動規則を認めないという意味ももちうる。女性が男性と同じ、障害者が健常者と同じ規則に従って活動することが求められることが、はたしてよいことかどうか、すぐには結論は出せないだろう。

このように、知的活動が大きな物語によって正当化されないポストモダンの状況では、規則の改良は進化ではなく、別の規則を排除する効率化という意味を持つことになる。そこに暴力性が生ずることになるため、リオータルは、従来とは異なる規則を認めるパラロジの重要性を強調するのである。

リオータルが、ポストモダンの知のあり方としてパラロジを主張したのは、異なる規則に基づく知が並存するというあり方こそが、上のようなモダンの知が孕む暴力性を避ける方途であると考えたからであった。そうした立場は、普遍的な知を目指したモダンの立場からすると、確かに積極的な見方を提示するものではないようにも見える。しかし、その方法は、大きな物語の基礎づけを失ったモダンの知をいったん解体し、ポストモダンの知として組み立て直す第一歩として選ばれたのである。第一章で触れた「差異に対するわれわれの感覚を研ぎすまし、また、共約不可能なものに耐える能力をより強くする」というパラロジの目的も、このような知の状況を背景として設定されたのである。

最後に、リオータルは、パラロジとしての知の在り方の妥当性がどこにあると考えているかを確認しておく。繰り返すように、パラロジは知的活動の多様なあり方を保証する点にポイントがあった。理性的人間による世界の解明という大きな物語が機能していた時代には、物語を実現する規則を用いていることが、知的活動の正当性の根拠であった。だが、大きな物語が喪失したポストモダンにおいては、唯一の規則に則って活動することは、知的活動の多様性を否定することにしかない。リオータルは、それが知的活動全体の活力を低下させることにつながるとして、次のように述べる。

われわれが行った科学の言語行為の記述に立ち戻るとすれば、今後は相違の上に強調点がおかれなければならない。コンセンサスは地平であって、決して獲得されるものではない。パラダイムの庇護のもとになされる研究は、変化を失う（安定化する）傾向にある。⁽¹⁵⁾

自然を解明する知も、科学の登場以前は宗教的な物語に支えられた規則に基づいてなされていた。しかし、近代になって宗教的物語が喪失し、異なる規則が認められる状況が現れたことによって、科学も誕生、発展することが可能となった。リオータルは、現代のポストモダンにも同様の状況を見て取る。つまり、この状況において、従来の規則に固執する限り、新たな知見も生まれず、現れたとしても受容されない。そして、そのことは、知の発展ではなく、むしろ低下を招く。このように、リオータルは、パラロジが多様な行為の地平を切り開くことで知的活動の展開を促すことを可能にするという点で、妥当性をもつと考えていたのである。

5. 結論

リオータルの定義するポストモダンとは、理性による世界の合理的理解を内容とする「大きな物語」が失われ、個々別々の規則に則って成立するパラロジにおいて知が存在する状況を言い表すものであった。そこには、大きな物語が喪失したにもかかわらず、依然として理性的理解に依拠す

ることから生じる暴力性に対する、リオタールの強い批判意識があった。リオタールは、ポストモダン論のみならず、美学やマルクス主義も研究対象としていたが、それらは、合理的解釈には収まらない美的なもの、資本主義的な社会論理から疎外される人間といった、理性的理解から排除される存在に対する一貫した関心に基づくものであった。ポストモダン論も、こうしたモダンの知への批判というリオタールの大きな関心の流れの中で位置づけられるべきであろう。それゆえ、また、理性的理解の残滓を含む知でもってポストモダンの知を語ろうとするならば、それは、リオタールのいう意味での「ポストモダンの知」の在り方とはいえないことになろう。⁽⁶⁾

リオタールが『ポストモダンの条件』を出版してからすでに30年強経過しているが、彼の主張は現代においても十分な有効性をもっている、あるいは、むしろ、その意義がもう一度再確認されるべきであるといえる。例えば、2011年に発生した東日本大震災以降、地震予知、原子力発電所の是非などの判断において、科学という知の役割が問われている。科学によって対象の全体を合理的に把握可能であるという主張は依然として根強くあるが、むしろ、そうした主張は「大きな物語」に支えられている。しかし、震災による甚大な被害を前にするならば、地殻の変動や原子力の運動の全体を本当に把握できるのかという疑問を禁じえない。そこでは、「大きな物語の喪失」や人間の理性の限界が、現代に生きるわれわれの実生活の問題として突きつけられているといえる。

また、科学に基づいて自然を解明する際、大きな物語の有無によって判断が異なるという指摘も、同じく現代にも妥当する。自然の解明の動機は経済活動と密接に結びついているため、同じ科学的判断であっても、単に自然の仕組みの解明を目的とする立場と功利性を目的とする立場では、解釈が違ってくる。このことに対する理解の不足が、科学的判断をめぐる議論を混乱させている一因となっていると思われる。

ある知の正当性を基礎づけることができない以上、まずもって行うべきなのは、知がどのような規則に則って成立しているかを理解すること、そして、その規則は問題の理解に対してふさわしいものかどうかを確認することであろう。それによって始めて、ポストモダンにおける知の議論が展開していく。そうした知の在り方の枠組を提示するという意味で、リオタールのポストモダン論は、今なおわれわれに示唆するところは大きいといえる。

(ばば・ともみち)

註

- (1) Lyotard, J 1979 *La condition postmoderne*, Les éditions de Minuit, 7
- (2) op.cit., 51
- (3) op.cit., 7
- (4) op.cit., 65
- (5) op.cit., 73
- (6) op.cit., 76
- (7) op.cit., 30
- (8) op.cit., 8~9

- (9) op.cit., 20~21
- (10) op.cit., 8
- (11) op.cit., 76
- (12) op.cit., 103
- (13) op.cit., 107
- (14) op.cit., 98~99
- (15) op.cit., 99
- (16) リオタールのパラロジ論も、このような関心にに基づき、暴力にさまたげられない知やコミュニケーションの在り方を提示しているのである。したがって、相対主義であるとか、コミュニケーションの不可能性を導くといったような、パラロジ論に向けられる批判は当たらないといえる。例えば以下のような批判を参照。「リオタールのようにゲーム・ルールをすべてアド・ホックなものだと観念してしまうならば、言語ゲームのルールは無限に拡散してしまい、科学的な共同体におけるコミュニケーションはもちろんのこと、日常生活世界におけるコミュニケーションも、はては仲間内のジャーゴンすらなりたたなくなってしまうことになりかねないだろう。」(山本啓 1995 <パラロジの背理>—リオタールのポストモダニズムをめぐって—, 思想, 852, 76~117)

The future of Postmodern on Paralogy in *La condition postmoderne*

Tomomichi Baba

The purpose of this paper is to reaffirm the philosophical concept of “postmodernism” and point out the effectiveness of the concept in the modern period.

Although Postmodernism is a concept used in many academic disciplines, it is difficult to say that the concept has a clear content. But it is need to confirm whether this condition is the disadvantage for discussing this concept, because such a relativity itself is natural as the value of the concept.

The object of the consideration is paralogy which is described in “The postmodern condition” written by J. Lyotard. Paralogy is a logic of wisdom that admits what should be of various wisdoms. In this paper, I will clarify the concept postmodernism considering the feature of postmodern, the relationship between paralogy and language game, the attention to others in paralogy.

Keyword: Postmodernism, Paralogy, language game, terror to others, grand narrative